

鷹巣誠一作 「**交わり**」

音楽 (会衆の賛美歌)(讚美歌 541「父、み子、み霊の」)

牧師 (祝禱)願わくは、我らの主イエス・キリストの恵み…。

会衆 アーメン。

音楽 (後奏)

司会者 これで本日の礼拝を終わります。なお、昼食の用意がありますので、なるべく大勢の方がお残りください。

効果音 (会堂のガヤ)

関口茂生 やあ、どうしたんだい？ 元気ないじゃないか。もう食事の用意できて皆座ってるよ。早くおいでよ。

清水ユリ (元氣なく)うん。

ナレーション 礼拝のあと。いつもは元気な清水ユリが、今日は大分ふさぎ込んでいます。彼女は高校 3 年生で、今年受験なのですが、悩みはそれだけではないようです。

関口(モノローグ) やっぱりあのことで悩んでるのかなあ。(間) 神様、僕の告白のことで彼女に思い煩いがあるのなら、どうか彼女の心に平安を与えてください。

ナレーション 彼、関口茂生は、大学 2 年生。彼も彼女も同じ教会のクリスチャンで仲もいいのですが、実は 1 週間前にこういうことがあったのです。

<タイトル>

音楽 (ブリッジ 回想)

関口 ユリちゃん。ちょっと話したいことがあるんだ。

ユリ いいわよ。でもどうしたの、礼拝が終わるか終わらないうちにそんなに急いで？

関口 うん、このことはずいぶん前から祈ってきたことなんだけど。実は、3 年前、高校 2 年の時ね、失恋したんだ。今考えてみると、すべて僕が悪いんだけど、あの時はほんとに傲慢だったんだ。そしていじけてた。“もう僕はだれにも愛されないんだ”と思っていたんだ。そして“だれを愛しても報いられないんだ。人間の愛ってなんなんだ？”って考えたことがあった。それが結局、神様を信じるきっかけにもなったんだけどね。

ユリ ふーん。そんなことがあったの。全然そんな風に見えないけど。それで？

関口 うん。でもね、僕はそこで神様の愛を知ることができたんだよ。高校生会や、教会の人たちの交わりを通してね。みんなの中には本当の愛があったんだ。神様を信じる者の、神様にある愛がね。

ユリ それは私にも分かるわ。私も、教会にいて本当に神様の愛が分かるの。まるで血を分けた家族みたいに、お互いに心を開いて交わることができる。そんな目に見える信仰の兄弟姉妹との交わりを通して、目に見えない神様の愛が肌で感じられる…。すばらしいことよね。

関口 うん。ところがね、相手が同じ年ごろの女性で、しかもある特定の人に好意を持ち始めると、やはり 3 年前の失恋のことが思い出されるんだ。だからこそ僕はずいぶん祈ってきた。でも“果たしてそれが報いられるんだろうか？ また無視されて、ふられるんじゃないだろうか？”という不安があったんだ。

ユリ ふーん。分かるような気がするわ。

関口 でもね、僕のその人に対する気持ちは、そんな中でも強くなる一方だった。そんな時、僕は一冊の本を通して、あることを教えられたんだ。

ユリ どんなこと？

関口 うん、それはね、羊の毛を置くということなんだ。F. G. ハンターという人が書いた「神様への緊急電話」という本にあったんだけどね、旧約聖書の中のギデオンという人が、神様にみ心を確認するという話なんだ。つまりね、「これからしようとするのが神様の計画なら、地面に敷いた羊の毛の上だけに露を降ろしてください」と祈ったんだ。果たして翌日起きると、そのとおりになっていたんだ。そしてその次は、「羊の毛のところだけ露を降ろさないでください」と祈って、その翌日もそのとおりになったんだ。ギデオンは、かなり自分勝手な願いをしたんだけど、神様は彼を用いるために、その祈りをかなえてくれたんだよ。

ユリ 私もその物語、知ってるわ。…それで、話ってそのことなの？

関口 うん、僕も”羊の毛”を置いてみたんだ。そして祈った。「僕の好きな人に対して、愛を持てるなら、あなたの愛を持てるなら、明日の日曜日、一番最初にあいさつをすることができますように」ってね。そしたら、今朝、ユリちゃんと一番最初にあいさつすることができたんだよ。

ユリ え?! それじゃあ…。

関口 そうだよ。僕の好きになった人というのは、ユリちゃん、君なんだよ。

ユリ え…。でも、困るわ。だって…。

関口 ごめんね。びっくりしただろう。でもね、これは祈った上で得た僕なりの答えなんだ。

ユリ でも、でも私、関口君の気持ちにこたえられるような人間じゃないわ。

関口 いや、これからどうなろうとも、僕は大丈夫さ。このことを通して、神様は何かを教えようとしているんだから。答えは今すぐには言わないよ。気持ちの整理がつくまで待っているから。

ユリ ごめんなさい。

ナレーション ユリは困っていました。実は彼女には、クリスチャンではなかったけれど、好きな人がいて付き合っていたのですが、ここ 1 年余り、あまりうまくいっていないのです。その付き合っている彼に別の女の人ができるとか、いろんなうわさの中で、彼女の心は荒れていました。そんな時に、関口君からの告白でした。そして更にその夜――。

効果音 (電話の呼び出し音)

ユリ もしもし清水ですが。

中村(フィルター音) ユリさんいらっしゃいますか？

ユリ はい、私です。あ、中村君？

中村(フィルター音) あのおさあ、あまりおれのことを束縛しないでくれないか？ おれ、今はそんな気分じゃないんだ。おれも君を束縛しないから。

ユリ あたし、そんな、束縛だなんて…。ううん、ごめんなさい。

効果音 (電話の切れる音)

ユリ(モノローグ) (泣きながら)私、そんなつもりじゃなかったのに…。

効果音 (ブリッジ 回想終わり)

ナレーション そして 1 週間後の今日の日曜日だったのです。

関口 ねえ、どうしたんだい？ 元気ないよ。

ユリ ううん、ただ気分が悪いの。私、今日はもう帰るわ。じゃあ、さようなら。

ユリ(モノローグ)(エコー)私はどうしたらいいの？ もちろん関口君はいい人よ。それに彼は大人だし。私なんて追いつけやしない。あまりにも大きい存在よ。それに私は今、まだ中村君のことを忘れられないわ。それに、彼に神様を信じてほしいし…。本当に神様を信じてほしいのよ。でも、でもやっぱり私、自己中心に考えてるのかしら？ どうしたらいいの？ 分からない。このままじゃ私、関口君に顔を合わせられない。神様、教えてください。

効果音

(ドアの開く音)

兄 ただいま。どうしたんだい、ユリ？ 昼食会や高校生会にも出ないで、急に先に帰ったりして。

ユリ あ、お兄ちゃん。(間)先週相談したことだけど、私、言えないの。どうしても今の気持ちを関口君に言えないのよ。

兄 そうか。でもいつまでもこのままじゃいられないだろ。関口君だって神様から示されたことなんだから。

ユリ うん。

兄 神様がこのことを通して何かを君たちに教えようとしているのは分かるだろう？

ユリ うん。

兄 だったら神様に祈って、それから自分の気持ちを神様に示されたとおりに言ってごらん。

ユリ でもお兄ちゃん。私言えないの。これを言ってしまったら、これから今までどおり接していけないような気がするの。

兄 ユリ。お前は大事なことを忘れていないんじゃないかい？ お前も関口君もクリスチャンだ。神様を信じて、神様に従っているんだらう？ それなのにお前の一方的な、人間的な思いで彼を遠ざけるということは、聖書が言うように、キリストに在ってお互いが愛し合うということにならないんじゃないかな。

ユリ …うん、そうね。

兄 大丈夫だよ、ユリ。今の気持ちを神様に打ち明けて、すべてをゆだねて彼に接するんだ。神様は、信ずる者に最善をなしてくださる。お前が思い煩うことはないんだよ。

ユリ (深くうなずいて)分かったわ。私、今から関口君の家へ行ってくる。そしてすべてを聞いてもらうわ。

ナレーション 彼女は、心に重くのしかかっていたものが、急に軽くなったような気持ちでした。そして、関口君の家への道すがら、“イエス様がきっと導いてくださる”と心の底から思ったのでした。その後、二人はどうなったのでしょうか？ ひょっとして、この二人は今のあなた、そして君ではありませんか？